

## 三角点クライマー



三方山（四等三角点、592.5m）。我々は山の頂上で三角点にまずタッチする。ここに来ましたと伝えるために。

四角い道標のようなものをはさんで互いに手を引っぱりあっているように見える変な写真は、実は、やっと見つけた三角点の上で感激の固い握手を交わしている図なのである。三角点クライマーのみが味わい得る感動を共有しているのである。

写真では笹の開けたところに三角点がはつきりと姿を見せているが、これはお目当てを探し当てたあと笹を退けたからで、われわれ三名が地図と磁石でこのあたりが頂上であると断定したところは一面二メートル近い高さの笹藪に覆われていた。頂上であると断定しても肝心の三角点にタッチできなければ頂上に来たことにならない。三角点クライマーの三人は笹をかき分け、あるいは這いつくばって必死になって探す。二〇分以上かかったろうか、焦りと嫌な気分になりかけたとき、「あつた！」とHが大声をあげた。三方山の四等三角点（五九三m）が笹におおわれてあった。この日予定していた四箇所の三角点の最後が苦労の結果見つかったのだった。

ここに来るまでに本日歩いてきた他の三つの三角点はそれぞれ以下の通りである。

麻生口（四等三角点、三六七m）、麻生山（四等三角点、五〇六m）、奥麻生村（二  
等三角点、六六二m）。これらはいずれも五万分の一の地形図「敦賀」に載っている。

地図が教えてくれるのは、われわれが今どこにいてその高さはどれだけであるかである。地図を作るための三角測量の基準点が三角点で、写真にあるように四角柱が地面に埋め込まれている。一等は一八センチ角、二等と三等が一五センチ角で、これらは地下部分に六〇センチ以上の柱石（地上部分と一体化した石の柱）を持っている。四等は一二センチ角と一番小さく、地下の柱石も五〇センチ弱である。

福井県にある三角点は、一等が八座、二等が六〇座。三等と四等の三角点は、登山の対象として標高を二五〇m以上とすると、六百あまりある（福井山岳会、朝日年男氏による）。上の写真の握手の主の一人が朝日さんで、彼は上記の三角点の九割以上を登り尽くし、今は残りを踏破すべく詰め段階に入っている。

なぜ、われわれは道なき山に入るのか、そして三角点を目指すのか。

道なき山に入るのは、山はこのような登山スタイルの登山者にその美しさを余すところなく見せてくれるからである。地図と磁石だけを頼りに山頂を目指す。自然そのものが、それらの持つ美しさとやさしさが、山に入ったわれわれを迎えてくれる。新緑や紅葉やすべてを覆い隠す冬の純白の世界、それらに取り囲まれていると、確かに、生命そ

のものといつていいものがそこにあるのを感じる。オーバーに聞こえるかも知れないが、ああ生きていてよかったという気持ち、感謝と喜びがわいてくる。「ありがとう」と言いたくなる。

ところでなぜ三角点に。それは、それにタッチしないとこのような感謝と感激におさまりがつかないからである。ここに来た、これで完了という、体操の最後の着地みたいなものである。残雪の頃は、雪を除いてその下の三角点を確認することがある。それほど大切なものである。

山で三角点を見るたびに、最初にそれを頂上まで担ぎ上げ埋めた人たちの苦勞に想いをはせる。大変な仕事であったにちがいない。山に実際にある三角点と地形図のおかげで安心して山登りが出来る。三角点がわれわれを待っているので、日曜日になると仲間をさそって山に入るのである。

(二〇〇五年七月二日)